

第 14 回 市長とジェンダーミーティング開催報告

日時 令和 8 年 8 月 27 日（木）14：00～15：30

会場 職員会館 3 階

参加者：市長、協働男女平等参画室長、企業・市民団体等 19 名、傍聴者、7 名、事務局 4 名

≪第 1 部≫

●市長挨拶

皆さんこんにちは。苫小牧市長の金澤俊でございます。本日は第 14 回の市長とジェンダーミーティングに、多数の皆様にご参加をいただきまして誠にありがとうございます。

14 回という会を重ねてきておりますが、今日もまた新たにご参加いただいている方もいらっしゃるしまして、様々なお意見を期待しております。本日は「子育てとジェンダー」について語り合うということでございまして、中田さんには日頃からいろいろとご協力いただいておりますし、助産院の方でも産後ケアの大事な部分を担っていただいておりますので、1 回の積み重ねとしては大変意義深いお話を聞くことができるのかなと思っております。私も現在子育て中でございますけれども、本当に色々なことを子育てを通じて学んでおります。

これは夫婦間のこともさることながら、子供たちに関わることは、家庭だけではなく学校、あるいは地域、あるいは習い事をしていればそういった各種団体との中で、様々なことが起きてまいります。

その一つ一つについて、どうやってこの課題を解決して乗り越えていけるのか。これは本当に個別具体的に違うとは思いますが、今日は各グループの皆様でそれぞれそういった問題を出し合いながら、何か共通する点が共有できる部分があるのではないかと考えております。

そういったものを一つでも二つでも見つけて、この子育てというテーマでのジェンダーギャップの解消に向けた大きな一歩を踏み出すことができれば幸いと思っているところでございます。ぜひともこの全体ミーティング、回を重ねるごとにその効果をいろいろな形で見出せていると思っておりますので、今日のミーティングも皆さんとともに意義深い時間になりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

●話題提供：中田知穂さん（助産院なりママ）

よろしくお願いします。ジェンダーについてお話をさせていただきます。助産院なりママの中田と申します。

簡単に自己紹介をさせていただきます。苫小牧市とむかわ町、新ひだか町の産後ケア事業を受託しております。市内唯一のレスパイトケア、産後の疲労回復を目的とした休息機能を持

った提供施設となっております。その他には、多世代交流サークルなりママ presents を主催しております。また、市と協働しまして包括的性教育の講演活動も行っております。プライベートでは男の子 3 人の母でして、実家の母の協力を得ながら子育てをしております。今回はそのような機会をいただきありがとうございます。

私は令和 6 年に男女共同参画推進フォーラムに参加させていただきました。苫小牧市で一般公募していたものに応募し選出をしていただき、埼玉県にある国立女性教育会館に派遣していただき、講演やシンポジウムに参加して、ジェンダーに関する様々な取り組みについて学ぶ機会をいただきました。

そこで「ジェンダーカフェ」という取り組みを知りました。ジェンダーについてモヤモヤした経験を話す場を定期的開催しているということを知り、私は今回このお話をいただいたときに、そのときに知ったジェンダーカフェのようなものをやってみたいというふうに思いました。そこで、助産師である私の周りには子育てに関するジェンダーのモヤモヤがたくさん集まってきますので、今回のテーマを「子育てとジェンダー」というところに設定させていただきました。自分自身が聞いてきたこと、感じたことなどを交えながらお話をさせていただきます。

いろいろなご家庭があると思いますが、今回はご夫婦で子育てをしている場面の場合のお話をさせていただきます。

まず初めに、ジェンダーというところの復習ですが、ジェンダーとは社会的・文化的に形成された性別や、男らしさ・女らしさといったような規範や役割意識のことを指しております。生物学的な性別とは別の言葉となっております。「こうあるべき」と作られた役割や期待のことを指しております。

例えば、男性は仕事、女性は家庭を守るというような役割ですとか、色で言うと、男の人は青、女の人は赤やピンクなど、「こういうものだ」というような考え方を指すものがジェンダーということになっています。国や文化が違えば、「何々らしさ」というものは大きく変わっていくというふうに言われています。日本は男性を立てるというような風潮があるかと思いますが、海外ではレディーファーストという女性を立てるような考え方もあるかと思いますが、自分が育ってきた環境、関わってきた人の考え方や言動、受けてきた教育によって、自分の「何々らしさ」という考え方がいろいろと作られていくと思います。

今日は妊娠・出産・子育てに関するジェンダーというところでお話をさせていただきたいと思います。まず、妊娠・出産は病気ではありません。病気ではありませんが、命がけで新しい命を産み出すという行為になります。

子育ての話をする前に、まず子供が生まれてくることについて少しお話をさせていただきたいと思います。私は助産師で、出産の瞬間、お母さんと赤ちゃん 2 人の命を預かる立場にありました。2 人の命の責任というのはとても重くて、毎回緊張します。赤ちゃんが生まれる瞬間、一度も緊張しなかったときはないですし、怖いと思わない日ありませんでした。なぜなら、生まれてすぐに泣かない赤ちゃんがいるからです。

自分で泣ける赤ちゃんもたくさんいますが、一部医療の手が必要になる赤ちゃんもいて、その都度毎回すごく怖い思いをしながら、赤ちゃんを無事に取り上げるという仕事をしていました。自分の手にその命がかかっているというのはすごく重大な責任なのですが、赤ちゃんはつい先週、元気な心音を妊婦健診で聞かせてくれたと思ったら、次の週の検診では心音が聞こえない、お腹の中で赤ちゃんが亡くなってしまうということもあります。

元気に生まれてくるというのは当たり前ではないということをお伝えした上で、産後のお話もしていきたいと思います。

産後のお母さんは全治 2 ヶ月の内臓損傷の状態です。これを聞いてピンとくる方は少ないのではないかと思います。外見が変わらないからです。体型はお母さんは変わらず元気な姿に見えるかと思いますが、体の中でどんなことが起きているかというと、まず胎盤という手のひらより一回り大きいくらいのサイズの臓器が体から排出されます。そうすると、体の内部にはこれだけ大きな傷口ができていう状態になります。その傷が治るまでに約 1 ヶ月間、体から出血があります。

その状態で、寝不足の状態です。子育てが始まっていくというのが産後の女性の状態です。言葉にしてこの状況をパートナーに話す機会というのは少ないので、妻の身にこういうことが起きているということをそもそも全く知らずに生活している方がいらっしゃるかもしれません。知っていてもやっぱりその体験というのはできないので、どれくらい大変なのかというのも想像することしかできないかなと思います。子宮が元の状態に戻るまでには約 2 ヶ月間かかるというふうに言われています。この産後のダメージは、ダンプカーにひかれたときと同じぐらいの状態というふうに言われています。

そういうふうに表現される中、寝不足で目を離すと死んでしまうかもしれない赤ちゃんを、緊迫した状態で育てていくというのが子育てになります。赤ちゃんのお世話だけではなく、子育てというのは子供がいる生活そのものを指していると私は思っています。赤ちゃんのお世話をすればいいというものではなく、赤ちゃんがいる生活をどうやって協力してうまく過ごしていくかというところが大事になってくるかと思っています。

最近では里帰り出産というものは少なくなっています。おじいちゃんおばあちゃんになる方が現役でお仕事をされているというケースがかなり多くあります。帰ってもサポートが受けられないので、自宅に帰ってご夫婦で子育てを始めるという方がかなり増えてきました。そもそもご実家が遠くて帰るのが難しいという方や、関係性がよくなくて疎遠になっているという方もいらっしゃるかと思います。そして最近では男性育休の取得が増えてきていますので、直接自宅に帰って 2 人で子育てを始めるというケースが多いです。初めての子育てを初心者で 2 人で何とか一生懸命乗り越えようとするんですけど、やっぱり難しさを感じている方たちも多くいらっしゃいます。

助産院で診ているお母さんたちの中には、苦小牧に結婚を機に引っ越してきて、初めての妊娠・出産・子育てというのが、周りに知り合いが誰もいないまま始まっているという方も多いなという印象があります。そういう状態で子育てをスタートさせていっているというの

が、私が診ている苦小牧の子育ての現状です。

子育ての現場から届く声としては、「私だってわからないのに私に聞かないでほしい」というお母さんの声があります。夫婦で一生懸命子育てをしている中で、「これはどうなんだろう」というのを奥様の方に聞く。でも奥様もわからないから、2人でどっちも責任が取れないというふうになってしまいます。

これはパートナーとしては、わからないことをただ聞いているだけに聞こえるかもしれませんが、決定するというのはすごく責任のいることで、自分の判断一つで赤ちゃんに何かがあったらどうしようと思うと、決めるのも難しくなってしまうことがあります。そのため「責任を押し付けられているようでつらい」という声が聞こえます。

また別の声では、「お父さんが育児をするとイクメンですごいねと褒められる。でも自分が同じことをしていても普通に見られてしまう」というものがあります。これは「お母さんは育児をするのが当然」というジェンダーが関わってくるかなと思います。

この時に私がお伝えしているのは、お互いに感謝の気持ちを伝え合うということが大切ですということです。よく「オムツ交換したよ」とか「お風呂入れたよ」ということに対して、パパはありがとうと言ってもらえるんですが、ママは言ってもらえない。でも、お互いにやったことに「ありがとう」と言い合える関係だと、自分がやっていることが当たり前ではないという、お互いが協力しているというふうに思えるというふうに聞きます。

また、「手伝うよ」という言葉に違和感を感じる女性の方も多くいらっしゃいます。この「手伝う」というのが、一緒にやるではなく、指示を出す人・中心になって行う人のサポートに回るよという意味に聞こえるというふうに言われています。

パパとも関わる機会がありますので、パパの声をご紹介しますと、「言ってくれたらやったのに」というふうな声があります。「何をどうやっていいかわからないんだよ」という声も聞こえるんですが、ママとしては「言わないとやってくれない」ということが出てきます。

さらにパパの話を聞くと、「何をしたらいいのかわからない。良かれと思ってやったら違うと言われるし、やったらやったで違うと言われる」。何をやっても何かと言われるというような状態で、もうどうしていいかわからないというような声も聞きます。これは圧倒的にコミュニケーション不足が原因だというふうに私は分析しています。様々なジェンダーを皆さんお持ちですので、男性がこうするべきだと思っている一方、女性はこうするべきだと思っている。別の考え方同士の2人が一緒に生活をする、「言わなくてもわかるだろう」が「わからない」という現象が起こってしまいます。

子育てにはいろいろな決めなければいけないことがあるんですが、本当にそこがうまくいかないということでご相談を受けることが多いです。

私の家庭の場合のお話をしますと、大学でジェンダーを学んでいたもので、少し一般の家庭と言われるものからは離れた選択をしたかなと思います。この大学で学んだことによって、より良く生活していけるように、お互いに考えを出し合って決めていけばいいということ

学びました。世間一般の「普通」という形にとらわれることなく、自分たちがどう生きていきたいかということを話し合った結果、私は自分の姓を名乗るという結婚をしました。

相手が自分の名字に変わるということで、当時の時代では結婚する人の中の3%だけが、女性の姓を名乗る結婚をしている時代でした。結婚を機に、私は出身の苫小牧に戻ってきました。そしてパートナーが退職をして苫小牧に転居するという形をとりました。どうしてこうしたかという、私は子供ができて自分の仕事は続けたいと思っていました。そしてそのとき、子育ての協力者は母がいいと思ったんですね。私の理想の母像は自分を育ててくれた母親なので、母の近くで仕事をしながら子育てのサポートを受けたいと思って、こういう選択をしました。いろいろな環境があると思うので、実家の近くにみんなが行けばいいというわけではないんですが、私はそのような選択をしました。

専業主婦の母に育ててもらった私はワーキングマザーになりました。どんなことが起きるかという、私の中のお母さん像は、お料理をして家事を全てやる女性だったんですが、私は仕事をしながらそれを全てやるというのがとても難しい状況になってしまいました。今思えばそこまで頑張らなくてもよかったかもしれないと思うんですが、ご飯を作るのは私の役割だと思い込んでしまいました。

出産後育休を経て職場復帰するんですが、病院勤務の助産師時代は翌月から夜勤が始まります。家を空けることもあり、仕事と家庭とのバランスというのはもうめちゃくちゃになるような生活だったんですね。残業することもありました。残業して19時半ぐらいに帰宅すると、お腹をすかせた子供とパートナーが待っているんですね。「嘘でしょ」って思いました。大人がいるのにご飯を食べさせるということがなかったんですね。当時私は私の役割だと思い込んでいたので、その結果、朝5時に起きて出勤する前に朝昼晩の3食を作って冷蔵庫に入れて出勤するという生活をしました。

これは本当にジェンダーが絡んだ話なんですけど、今思えば買って帰ってもらってもよかったし、食べて帰ってもらってもよかったんですが、私は専業主婦の母が毎日食事を手作りしてくれていたんで、食事を手作りするものだと思い込んでいました。こういった思い込みから、私がやらなければいけないと思って一生懸命やっていたんですね。

私の父もお料理する人ではなかったんで、パートナーに「料理して」というふうな願いをするという考えも浮かばなかったです。今になっては息子にたくさんお料理を教えています。こういった経験から、こういうふうになってほしいなと思ったことを、また次の代に伝えていくというのがいいなと思っています。

無意識の思い込みに気を付けるということで「やらなきゃ」ととらわれていた自分の考えですね。女性は家事・男性は稼ぐという思い込みがすごくありました。でも、お互いに尊重することがとても大切です。

「収入の差があるから女性は家事負担を多くするのは仕方ないんじゃないか」という話が出ることもあるんですが、私が結婚していた当時、一度も給料でパートナーを下回ったことがありません。この「収入が高いから家事を負担しなくていい」とか「仕事で疲れているか

ら休ませてくれ」というのは、その状況にある考え方——これもジェンダーの考え方だと思いました。実際に収入が女性の方が高くなったとしても、役割を担うのは女性の方が多かったんですね。これは私の家庭の場合なので、いろいろな家庭があるかと思いますが、そういうふうに感じました。

ちなみに、専業主婦の家事育児の時期を外部委託の仕事として人に頼んだ場合は、年間で1,000万円以上の費用がかかると言われています。これを多くの女性は家庭内で無償で引き受けているという現状があります。

「仕事が疲れてるから勘弁してくれよ」というような話も聞きますが、シングルの方だったらどうでしょうか。シングルファーザーもシングルマザーも1人で全てを担っていると思います。2人いるご家庭ではその分担方法はそれぞれ自由だと思うんですが、これだけで決めるのではなく、やっぱりお互いが納得のいく話し合いができるといいのではないかと思います。

最後に、このイラストですが、どんなことを読み取れるか少し考えてほしいなと思って作ってきました。これから旅行に行くのかなとか、男の子と女の子が仲良くなって、ピンク色が女の子に見えますよね。怪獣は男の子のお洋服に見えますよね。こういった「これってこうなんだろうな」と思うことが、そもそもジェンダーと言われるものなんですが、荷物を持っているお父さんを「偉いね」と思う人がいるかもしれないんですが、赤ちゃんを抱っこしているお母さんを「偉いね」と思うことって少ないんじゃないかなと思うんです。これは、子育ては女の人がするものだと思っているからそういう考えになるのではないかなと思うんですが、私にはこう見えるんです。

赤ちゃんはすごく重たくなっていきます。生まれたときはまだ軽かったかもしれないですが、8ヶ月から1歳前後に赤ちゃんは10キロになります。この旅行の中でお母さんがこの赤ちゃんをずっと抱っこし続けるというのは、かなりしんどいことだと思います。キャスターのコロコロが付いている方が全然軽いですよ。きっと「重いものを持つのは男性」という考え方もまたジェンダーの一つかと思いますが、こういったところをどう感じるかというところを皆さんとお話していけたらと思います。

もう一つ、インスタグラムを見ていたら流れてきた動画に鋭いツッコミがあったので、ご紹介させていただきたいと思います。「明日はママの誕生日。パパと娘が夜に話をしています。パパが『明日ママの誕生日だから、俺たちで頑張って家事やってママを楽させてあげよう』娘さんが『いいねいいね』って言ってるんですね」。この優しいお父さんに見えるかもしれないですし、この時点でもうモヤモヤを抱えている方もいるかもしれません。どうしてかという、娘さんからの鋭いツッコミです。「でもそれって一緒にやればママも早く家事終わって楽できるってわかってるのに、知っててやらないってこと。パパひどいね」という動画だったんですね。

これがまさしくジェンダーのモヤモヤだと思います。わかっているけど自分がやるべきこととは思えないとか、違う——相手の役割だと思ってやってあげようと思っているのに、と

いう考え方のずれですね。こういったことがあると思います。

たくさんのロールモデルに出会うことが大切だと思います。良くも悪くも、自分を育ててくれた親の姿が子育てのロールモデルになることが多いです。家庭の中で家庭のルールというのできていきますので、様々な過程でいろいろな子育てをされているという方を見る機会があると、視野が広がっていくのではないかと思います。

私は多世代交流サークルでボランティア学生さんを巻き込んだイベントを行っています。また、結婚・妊娠・出産をイメージできない若者に、様々な子育てをしている姿を見せます。そうすることで、自分がこうなりたいなとか、自分の家とは違うなという気づきが少しずつ生まれているなというふうに思います。

子育てを当事者や親世代だけに閉じ込めず、地域全体で関わる環境をつくることが大切だと思います。これから親になる人には参考になる話が聞けるとか、子育てを一段落した人にとっては知恵や経験の伝授ができるとか、人との違いを知るきっかけがあると考え方が広がっていくのではないかと思います。

今日はこの後、グループで子育てとジェンダーのモヤモヤについて皆さんで話したり、テーマを選んでお話することになっていますので、この話が何かのヒントになりましたら幸いです。

ご清聴ありがとうございました。

《第2部》

グループディスカッション発表

D班発表

Dグループが選択したテーマは、3番「男性の育児参加を応援するために周りができることは」というテーマを選びました。その中で意見として出たのが、企業の取り組みの一つで、育児休業中の業務を代替した方に手当をつけるというような制度を創出したということが、一番心に残って検討させられたものになります。

これはやっぱり、育児休業を取る本人が休むときに周りの人に申し訳ないというふうに思っていて、なかなか休みが取りにくいところを、逆に休んでも代わりに仕事をしてくれた人が手当をもらえるということで、休む人も心置きなく休みやすいというような制度になっているところがみそかなというふうに思っています。Dグループからは以上です。

B班発表

我々Bグループが選択したテーマは、2番「誰もが生きやすい、子育てしやすい苦小牧にするために身近でできる小さな一歩」というところ です。

一番心に残った意見としては、コミュニケーションに対する意識というところで、現状子育てしやすい苦小牧にするためにこういうところが足りないというところを言い出したらあまり際限がないというところで、まずは家庭だったり職場だったり小さな輪からコミュ

ニケーションを始めて、これまで培ってきたステレオタイプを擦り合わせて、モヤモヤをなくしていく。自然にその輪が広がっていった、最終的には子育てのしやすい苦小牧にするために必要だったことが必ず実現されているんじゃないかなというところで、まずは根底にあるコミュニケーションに対する意識を変えるというところが、今できる小さな一歩というところです。以上です。

C 班発表

C グループはテーマ1「子育てと仕事をどう両立してきたか。これからの世代がもっと楽になるにはどうしたらいいか」ということについて検討を行いました。

一番大変だったのはやっぱり、お子さんが病気になると困るということが共通の認識がありました。その場合、何が助かったかというところなんです、やはりお子さんを預かってくれる存在があるということで、例えば祖父母、また保育所といったところが、これがあることによって非常に楽になったというご意見が多かったです。あと、配偶者に対しては、一定の役割を分担してくれるということが非常に助かったというふうな意見が多かったと思います。

今後、公平にアドバイスするとしたらということですが、100 点満点を狙っていかないと、気持ちを楽にしながらお互いに役割を分担して生活していくことが重要だというご意見が出ました。以上でございます。

あと、私は個人的に非常に衝撃だったのは、産後の大変さが全治 2 ヶ月の怪我というぐらいのダメージがあるということですね。あと、ご意見の中にあったのが、子育てはゴールがある程度決まっているんですけど、この後、高齢化社会になっていって介護になったときに、子供の数が減っている上に高齢者が増えているという中でいくと、ゴールが非常に見えないというところがあって、今回の子育てとは関係ないんですが、介護というのもまた今後重要な課題になるのかなというふうに思いました。以上でございます。

A 班発表

A 班の選択テーマは、「子育てと仕事をどう両立してきたか。これからの世代がもっと楽になるには」というテーマを話しました。この前段階で問題になったのは、子供がいる家庭についてだけ議論していたら、子供のいない独身の人に対してどうなのかという問題がまず初めに出了ました。これは前提条件でそれで全然変わるわけですね。

具体的なことを言えば、「幸せは全部独身の人に行くのか」という声が、実際 SNS で結構出ているようです。

私たちの結論から言うと、「お互いに理解しましょう。わかり合いましょう」ということが基本なんです。これは子育てだけじゃなくて、社会のあらゆることがお互いに理解することなんです。政治もそうですけど、それができない。それをどうしたら理解できるかということとを本当は話し合わなければいけないんですが、この 15 分 20 分ではちょっと話ができな

かった。

それでもあえて言えば、日本人は今まで「お互い様」とか相互理解とか、社会的な理解とか思いやりとか、そういう教育も含めて人との縁を大事にしてきました。それが私たちの年代から次の子供たちに繋がってきていなかった。私はかなり年を重ねてきて、一番大きい問題だと思ったのは、日本人の良さが次の人たちに繋がっていないので、若い人たちが権利意識とは言わないけれど、主張だけは強くなってしまっている。

その中で、あえて私たちのテーブルでは、お互いに理解する、相手のことをできるだけ考えようということに重きが出ました。以上です。

総評

市長：

四つの班から発表していただきましたけれども、やっぱりどこか共通するところがあるのかなというふうに思いますし、最初の中田さんのご講演を皆さん拾っていただいたところも多分にあるんじゃないのかなというふうに思っております。ちなみにまず一つずついきます。

D 班の育児休業中の業務代替の手当制度ですけれども、実は市役所も過去の全体ミーティングで同じような話が出て、「女性から選ばれる職場づくり」というテーマでやったときもそうなんです、実は内部で検討してるんですよ。いろいろとまたいろんな声が出て練り直してる場所なんです、これ具体的にどのように制度化しているか、いろんなやり方あると思うんですよ。みんなに均等にお金をあげるとか。何かあると思うんですけど、それをちょっと詳しく聞かせていただきたいと思います。

D 班代表：

ちょっと細かいところまで頭に入っていないので恐縮なんです、1 人休んだときに業務を代替するメンバーが 3 名までですねというルールを作っていて、その 3 名がその人のやっていた仕事を分担してやったときに、1 人月額いくらというような手当をつけているというものになります。結構やっぱり「俺もやった、俺もやった」ということでいっぱい手を挙げる人が出てくると思うので、そこはグレーな部分も多いんですが、そこは所属長がきちっと決めて、この仕事はこの人が代替をやっているというようなところをしっかりと決めて手当をつけるというふうにしています。

市長：

ありがとうございます。実は穴が開いたら、まずその代わりの人をつけるということをまず基本と考えながら、もう無理な場合にこういった手当制度でやるというような整理もあるんじゃないかなと思っています。もし発言ありましたら。

D 班代表：

すいません、その前提としてそうおっしゃる通りで、まずはその穴が開いたところには補充の人を入れるというのが大前提であって、それが賄えない場合にこういったことも可能ですよというようなたてつけにはしております。

市長：

ありがとうございます。大変参考になりました。

次に C 班でございますけれども、子供が病気になったときに預かってくれる存在が助かるということだと思います。これはやっぱり、例えば私の家なんかはもう両親とも、私が結婚したときにはもう病気で亡くなっていなくて、家内の方のお母さんが 1 人しかいないという状況ですとやってますけれども、それでも何か面倒を見てくれると助かるというのは非常にわかるんで、やっぱりそういう環境にないときにどう支えるかというのがあるかと思うんですね。ですから病児・病後児保育だとかって市もいろいろとやってますけれども、そういった環境作りも大事なんだなというのを感じました。最後に丹羽さんがおっしゃった、子育てが終わった後のこの介護の部分も、言われる通りやっぱりどのように助け合うかというのが非常に今後のテーマとして、本当に真剣に考えなきゃいけないんじゃないかなと思いましたので、そういった問題提起をいただいたということが大きかったと思います。ありがとうございました。

それから B 班ですけれども、コミュニケーションに対する意識ということでありました。私もちょうどお話を聞かせていただきましたが、本当にいろんなことに一貫して、当然相手はわかってるよなって思うことも実は理解されてなかったり、こっちが言いたいことも理解されてなかったりというのはお互いにやっぱりあろうかと思いますので——さっき食洗機の話をしたんですけど、私も良かれと思って台所の片付けをしたら、やり方が違うと言われたこともありますし、「それじゃなくて違うことをやってね」ってかなり思ってたかもしれないし、そこもやっぱりコミュニケーションかなというふうに思いました。あらゆることにやっぱり人間同士ですから、夫婦家族とはいえいろいろあると思いますが、コミュニケーションの大切さを認識いたしました。

最後に A 班ですけれども、大変経験豊富な榎戸さんのお話でございましたけれども、やっぱり「お互い様、相互理解、思いやり」というこの言葉が大変重たいなというふうに思っておりました。色々なことがあってもそういったお互いを理解するこの姿勢がまず大事だし、それを相手の気持ちを受け止めるということもすごく大事だというふうに思いました。こういったところも、おそらくいろんな個別の事象についてお話し合い、意見が出たと思うんですが、やっぱりこの「相手を思いやる」とか「コミュニケーションをしっかり取る」という根本の部分というのが、このジェンダーギャップの解消にも繋がっていくんじゃないかなというふうに、発表を聞いて思いましたので、そのようなことで総評をさせていただき

たいと思います。